

# 「力を合わせ、行動を起こすことの大切さを伝えたい」

活力を失いつつあるモンゴルの地方の村で、お菓子の製作・販売を通して、人々に力を合わせて行動を起こすことの大切さを伝えようと奮闘する青年海外協力隊の南香代子さん。根底には、この国と人々に対する深い愛情がある。



バヤンアグト村役場の同僚たちと南さん(右端)。年間予算約400万円という小さな村で、住民代表者から選出された代表議会と村役場が共同し、さまざまな行政サービスを行う

## 大好きな国で 青年海外協力隊に

南香代子さんがモンゴルに興味を持ったきっかけは、高校時代に図書室で手に取った一冊の写真集だった。どこまでも広が

る大草原、素朴な遊牧民たちの暮らしぶり、色鮮やかな伝統衣装が目が釘付けになった。「こんな素敵な国に行ってみたい!」と一躍あこがれの地となり、大学の専攻では迷わずモンゴル語を選択することに。「今から考えると『若気の至り』という気も

しますが(笑)。

在学中には、首都ウランバートルにあるモンゴル国立大学への9カ月間の語学留学も果たした。しかし、思い焦がれた国で学んでいるという充足感とともに心に抱いたのは、多くのストリートチルドレンやごみ処分場のウエイストピッカーたちを通して見る、貧困の現実への複雑な思いだった。「私はモンゴルが好きで、この国の言葉を勉強したくてここへ来ることができた。恵まれた立場にある。とてもお世話になっているのに、目の前の貧困にあえぐ人々のために自分は何もできない。こうしたやりきれなさが募り、将来は国際協力という形でこの国にかかわっていきたくて真剣に考え始めた。そして大学卒業後の2006年6月、村落開発普及員として、ウランバートルから北西に600キロ離れたボルガン県バヤンアグト村にやって来た。

日本のおよそ4倍の国土を持ち、人口約260万のうち40%近くがウランバートルに「極集中するモンゴルでは、近年、基幹産業である農牧業を含む地方産業の疲弊と失業者の増加が深刻だ。バヤンアグト村でも、人口約3200人のうち3分の2近くが農牧業に従事し、生産物の多くが自己消費されるため、ほかにこれといった産業もなく経済が停滞し、失業者も増えている。そんな中、村役場に配属された南さん。赴任当初は精力的に各家庭を訪問して人々の話を聞き、住民の抱える身近な問題や村の共通課題の把握に努めた。その結果、共通する一番の問題として、「限られた収入手段」「住民自身の金銭面に関する計画性の欠如」といった点が見えてきた。さらに村役場のソーシャルワーカーからは、「状況改善への訴えはあるが、自分たちで行動を起こすことはなく、条件が整うのを待つのみ」という住民の姿勢についても聞いた。

そこで南さんが行ったのが、身の回りの問題と解決方法を住民自身に考えてもらうワークショップ。だが、いざふたを開けてみれば、参加者が抱いていたのは、南さんやJICAが資金やモノを援助してくれるのではないかと期待だった。しかも違うと分かった途端に「この村には何の可能性もない」「解決法があれば誰も困らない」「JICAは何もしてくれないのか」



Minami Kayoko

## 南 香代子

青年海外協力隊

挑戦者たち  
Stories of  
Challengers  
Vol.25



「自分が一方的にアイデアを提供して住民を参加させても、彼らが自らの問題として考えない限り、変化は期待できない」と南さんはワークショップを通じて、行動に移すことの大切さを粘り強く伝える

とする有志のグループを結成し、収入機会の拡大と住民自身による行動事例の一つとすべく、お菓子作りを始めることになった。

### 空き巣騒動にもめげずに

材料費を各自出し合い、村の協力者からオープンを借りることもできた。7〜8人ほどのメンバーは週3〜4回家事や農業などを終えた後、村の食堂に集まり、試作を繰り返した。そのかいあって製品が市場で完売するようになるのにその時間はかからなかった。誕生日用のデコレーションケーキや「イエウエン」と呼ばれる旧正月用の飾り菓子など、メンバー自身のアイデアによる製品が作られた。さらに村の学校でおやつ用の時間に提供されるお菓子として製品を採用してもらうなど、この試みは順調な滑り出しを見た。

活動を進める上で南さんが最も大切にしたのは、村にある材料で、村の特性を生かした商品を作ること。現段階ではまだ村内にとどまっているが、今後のマーケット拡大を見据える上で強みになり、また材料費

は順調な滑り出しを見た。活動を進める上で南さんが最も大切にしたのは、村にある材料で、村の特性を生かした商品を作ること。現段階ではまだ村内にとどまっているが、今後のマーケット拡大を見据える上で強みになり、また材料費

も安く抑えることができる。小麦を使ったお菓子は比較的种类が多いモンゴルだが、見栄えにひと工夫されていたり、卵が入ったものなどは村ではまだまだ新鮮なようだ。

また、村人は一般的に自己主張が強く、他人と協力して何かを成し遂げた経験がない人が多い。そのため、初めはグループ内の協調に苦労したが、南さんが笑顔で率先して皆の話を聞き、話し合いで問題を解決する姿勢を見せることで、共同作業に対するメンバーの理解が徐々に深まり、グループとしての結束も高まっていった。

軌道に乗り掛けたお菓子作りが危機がやって来たのは、旧正月が明けてイエウエンの販売も一段落したところだった。作業場としていた食堂に空き巣が入り、売上金をすべて盗まれてしまったのだ。ちょうど利益配分ができるめどが立ってきた時期での事件だったために、メンバーの衝撃は少なくなかった。活動意欲も低下し、その後間もなくカシミアの刈り取り時期が到来して多忙になったのも重なり、自然解散のような形ではばらく活動は停止することになった。



意見がぶつかることもあるが、普段は和気あいあいと活動するグループのメンバー。家事や仕事の後の活動にもかかわらず、疲れも見せずお菓子作りに精を出す

的に近隣保養地への販売ルートの開拓も視野に入れていた南さん。「任期が終わっても村人たちが活動を継続できる体制を作れるよう、最後までやり遂げたい」と話す。この活動を通して南さんが一番うれしいのは、たとえ利益が配分されるまでに至らずとも、メンバーが自分たちで作ったものが売れる喜びを実感し、新しいアイデアが次々に生まれ、活動に積極的にかかわるようになったことだ。「最終的にメンバーの収入源になればいいのです

が、まずはチームとして助け合い、何かを作り上げること。こんなに大きな成果を生み出せるという一つの例として村の財産になれば」と期待を寄せている。任期も残り半分を切った今は、一部のグループの活動だけでなく村全体の取り組みとしても何かを残したいと、お菓子作りと平行して、ごみの収集・廃棄システムの導入も進めている。公共の概念がないためボイ捨てがひどく、収集システムも機能していないバヤンアゲト村だが、

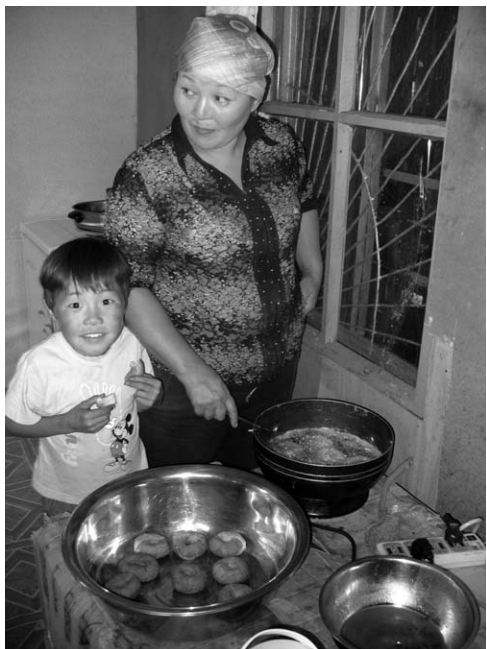
南さんが行った調査により、予想以上に換金可能な廃品が多いことが分かり、村役場も強く関心を示しているという。同僚と試験的に、祭り会場で住民にこみの分別を呼び掛けたことも予想以上に成果を上げるなど、今後の展開の可能性に自信を深めている。

南さんの活動は村中に知れ渡り、今では彼女を知らぬ村人は一人もいない。村人たちは感謝の言葉を面と向かって言うことが苦手で、不器用ながらも行動でそれを伝えようとするのを感じてもらう。用事で村を離れる機会があると、お菓子作りのメンバーや村人が首を長くして南さんの帰りを待っており、「どこに行つたの?」「遅い!待ってたのよ!」と半分怒ったように声を掛けられるのがたまらなくうれしい。「帰国する日のことを考えると、今から泣けてきてしまうんです」と言うほど、南さんは村と彼らを愛している。

ったので、オープンを使わずにできる製品を作り出さなければならなかった。考えた末、油で揚げるドーナツと、野いちごやヨーグルトを使った蒸しパンを作ることに。製品の評判は良く、特にドーナツは思いがけない大ヒット商品となった。その後、ローンを組んで念願のオープンも購入。製品の種類は増え、ケーキ・クッキー・焼き菓子もメニューに加わった。さらに学校へのおやつ販売も増え、今では1カ月に44万7000トウグルグ(約4万5000円)を売り上げるなど、活動の大事な収入源になっている。また、メンバーに資金管理の重要性を学んでもらうという狙いもあり、銀行に開いたグループの定期預金口座に利益を貯蓄し、一定の条件の下でメンバーが利用できる共同基金も活用している。

自分たちで作ったものが  
お金に変わる喜び

今後は、マーケット拡大を目



ヒット商品となったドーナツは1個100トウグルグ(約10円)。子どものお小遣いで購入しやすく、手軽なお土産にもなるため、瞬く間に大人気

助け合い、何かを作り上げればこんなに大きな成果を生み出せる、という財産を残したい



肉食中心で年齢とともに肥満になりやすいモンゴルの人々。せめて運動不足の解消にと、南さんが村役場職員に紹介した日本のラジオ体操。「皆やせると信じて一生懸命やっています(笑)」

### Minami Kayoko

みなみ・かよこ 1980年長崎県出身。東京外国語大学外国語学部東アジア課程モンゴル語専攻。在学中にモンゴル国立大学に語学留学。2006年6月から青年海外協力隊・村落開発普及員としてモンゴルに赴任。任期は08年6月末まで。